IV

アーバンデザインの導入
～横浜からアジアへ～
平成 22 年 2 月 22 日

講師
岩崎駿介

国吉：岩崎さんは、1960年の終わりにボストン市役所のアーバンデザインチームに属して活動され、その経験を日本でも生かそうとその当時の飛鳥田一雄市長を頼って横浜市職員となり、活動されました。そのとき、私も横浜市に入りまして、岩崎さんと活動をともにしました。私自身は、アーバンデザインといったアメリカのことを勉強したわけではないのですが、岩崎さんの考えに触れて、能動的にやりたいという思いから岩崎さんと一緒に働きました。

当時は、飛鳥田市長のもとで田村さんが活躍されていたのですが、飛鳥田市長が社会党の委員長になられるとのことで辞められ、その後市長が細郷さんに代わりました。岩崎さんの考え方によると、市長が代わると上手くいかないと考えられていたようで、この辺りの話は後程詳しく、お聞きしたいと思います。

横浜での活躍後は、国連のアジア太平洋経済社会委員会、ESCAP という組織の人間居住課長を務めていらっしゃったのですが、そのころからアジアの問題に関心が移られたのではないかと思います。そちらに三年ほどいらっしゃった後、筑波大学へ転身なされています。その後は、日本国際ボランティアセンターを創設され、アジアとのさまざまな国際協力に携わる活動のリーダーとして活躍されています。

今日は、企画調整室でアーバンデザインをやろうとしていたときに、どのように活動をお考えであったかが大きな論点となると思います。また、現在の横浜、あるいは世界をどのように見ているのかということをお話しいただければと思います。

岩崎：皆さん、こんにちは。いま、国吉君から紹介されたように、私は横浜市で9年間働きました。今日、山下公園からずっと、時間にすると一時間半でしょうか、歩いてきて、実に30年ぶりに見たのですが、何と言いますか、圧倒されたことと言えば、新しいビルや都市のある意味の活力というものを感じましたし、これから歴史を重ねることで、「魅力ある空間になるかもしれない」ということを感じました。

40年前の1970年12月に横浜に入りました。それから数えると今年で40年になるのですが、40年前を知ることによって、これからの40年、すなわち2050年の社会や都市を考えるため、この講義に至ったのだと思います。過去の話を聞いて、あーそうですか、としても意味がないわけでして、そういう意味で、私自身も、過去の話も若干するのですが、最大の問題というか興味はですね、40年後がどういう社会と都市になっているのか、ここをみなさんと一緒に考えたいと思います。

正直言いますと、私の話は多岐にわたると云いますか、つまらないといいますか、あまりにも多くのことを喋りすぎるために、2、3日すると何を言っているのか全然思い出せないということが今までの事例からすると多いようです…。まあ、それを含めて楽しいひと時を過ごしていただければと思います。

岩崎先生の経歴

私は、大学を卒業して2年半ほど同級生と一緒に建築設計事務所を開き、建築設計をやりました。その後、アフリカのガーナへ行きました。当時、アフリカは長い植民地時代の後、1957年に初めてガーナのエンクルマ大統領がガーナを植民地からの脱出に導きました。エンクルマ大統領の本が日本で出版されていたのですが、私はそれを読んで、建築と社会、建設と国家との関係を知りたいと思い、新興独立国ガーナに行ってみたいと思ったのです。と同時に日本以外の国も一度は見てみたいという気持ちも強くありました。

ガーナでの活動

そこで、ある日ガーナ大使館に行って、貴方の国で働きたいと言ったのですが、珍しい奴が来たと思われたのでしょう、私は住宅公団のような仕事を求めたものの、そのような仕事はなく、大学の先生の職を紹介されて、結局、大学の専任講師を二年間ガーナでやりました。

当時、大学卒の初任給は1万5千円という時代だったのですが、ガーナではいきなりなんと19万円の月給を頂くという高給外国人教師だったのです。私以外

は、ほとんどが欧米人、アメリカ人、イギリス人、北欧の方でした。

私は、そこで初めて日本以外の国、それも俗にいう開発途上国という場所に触れました。ガーナでは長いイギリスの植民地時代に培われた悲しみといいますか、そういった虐げられた歴史を垣間見ることができました。

都市を学ぶべくハーバード大学へ

そこで二年が経ちまして、さらに建物と建物との関係、都市と社会との関係などをもっと学びたいという気持ちになり、ハーバード大学のデザイン学部都市デザイン科に応募したのです。ハーバードへの提出願書に大学時代の成績表を提出せよというのがあり、私は学生時代、安保闘争という学生運動を熱心にやっていたので、1年生の時の総合評価はAなのですが、2年の時にB、3年ではC、4年の時はDでよければ卒業させてやると言われた成績表を提出したのです。ただし、私はその成績表に加えて、「この評価は間違っている。私は安保闘争をしながら日本とアメリカの関係を真摯に考えていたのであって、教師の判定は間違っている」と言って提出したら、難なくパスしたのです。

二年間のハーバード生活では、ものごとを論理的に考えるということを学んだと思います。図面などについては自信があって、問題なかったのですが、理論的な問題がたくさん出され、理論的に考えることを学んだのではないかと思います。

ボストン市役所の活動

アメリカでの最後の年、ボストン市役所でダウンタウンの再開発計画に携わりました。

ボストン市の黒人街実態調査にもかかわりましたが、街をくまなく歩き廻って、街を見る力がついたと思います。

このように開発途上国ガーナと先進国アメリカという二つの国を各々二年から三年経験したのですが、ガーナやアメリカは結局、私のものではないのですね。その当時、ベトナム戦争や黒人暴動といった状況が話題になり、自分の仕事と社会の問題との関係をもっと真剣に考えなければと思いました。

飛鳥田市長と田村明氏との出会い

私は朝日ジャーナルという雑誌をアメリカでも読んでいたのですが、その記事の中で横浜の飛鳥田市長が座談会に出ていたものがあり、その記事に感銘を受けて、横浜市に興味を持ったのです。すぐに日本に戻り、飛鳥田市長に会いに行きました。市長は、田村君という人がいるから会ってみなさいといわれましたが、田村さんとは以前から知り合いだったのです。田村さんが勤められていた浅田孝さん主宰の環境開発センターの事務所が私たちの事務所の上にあったものですから、よく渋谷行きのバスで乗り合わせていました。私は、横浜市を訪ねた当時、既に三十三歳で、人事担当の入江課長さんから「嘱託だったら入れてやるよ」と言われました。日本に帰ってきたばかりで、「嘱託」というものが偉い役職なんじゃないかと勘違いしてしまい、「それで結構です」と言いました。しかし、嘱託とは、いうなればアルバイトだと云うことは、後ですぐわかりました。つまり、皆が年2回のボーナスを貰うとき、私だけが貰えなかった。私も人一倍働いているつもりでしたが、2年間ボーナスは出ず、女房に生活が苦しいとよく言われました。そう意味で、横浜市に決して招聘されたのではなく、自ら門をたたいたのです。二年たって「入れてくれ」と言い、ようやくボーナスがでるようになりました。それから9年間、国吉君と一緒に、はじめは二人だけでしたが、都市デザイン行政をいろいろと試みたわけです。

歩行者が気持ちよく歩ける街へ

配布しました資料に、「擁護すべき価値」、「美しさへの空間的技法」、その下に「アジア都市の空間的特質」とありますが、この上の二つの項目は、私が四十年前横浜市にいたときに書いた本の項目をそのまま、ここに書き写したものです。「擁護すべき価値」とは、都市

デザインのいわば目標を意味します。また、「美しさへの空間的技法」には、「歩行者が安全で気持ちよく歩ける」、「その地域の地形的特徴を尊重する」、「公園や緑を出来るだけ多くかつ連担した形で確保する」、「池、川、海などできるだけ水に触れる」、「人の触れ合いを促進する」、「歴史的資産を大切にする」。そして最後に「形態的秩序を作り出す」と技術的な手段を並べてあります。こういうことをやりたいと思ったのです。

私が横浜市に勤めていたときは、東京の日野市に住んでいました。片道の通勤に二時間、往復四時間かかりまして、一日の内、六分の一を通勤にかけていました。九年間働いたので、六分の一、つまり一年半は電車に乗っていた勘定になります。

通勤の際に交通事故を見たこともありました。私は横浜線の駅まで自動車通勤していたのですが、道路を渡ろうとする子供を私の前を走っていた車が撥ねたのです。やはり危ないという思い、歩行者が安全に歩けることがどんな大きな意味を持つかを感じました。

最初は、これらの都市デザインの価値を理解してもらうのがたいへんでした。「美」より「用」、美しさよりも機能が重視され、都市デザインの価値は余計なものであるとなかなか理解されませんでした。

しかし、国吉君と頑張って、これらの価値を少しずつ理解していただきました。今日も、国吉君と港の公園や噴水のそばを歩いてきましたが、その当時は公園内に噴水を作ることさえ子供に危険だからと反対されたこともありました。

配布資料の「美しさへの空間的技法」にあります「群衆の中の孤独」、あるいは「すべての都市活動をステージ化する」とは、つまり「見える」、「見えない」の関係について触れたものです。「空間をよぎる門を積極的に演出する」、「歩くことの完結性を得るため、だんだんと高まり行く道」とは、たとえば浅草の浅草寺のように、ある門を入ってずっと歩いて行くと終点がありますが、そのような行為の完結性を言っています。

都市の中にそのような魅力ある空間をいっぱいつくりたいと思いました。それから「機能的な道、非機能的な道」、「徒歩圏内に多様なアクティビティを包含する」、「行き止まりの道と路地を作る」、さらに「開放と閉鎖の対比をはっきりさせる」などといろいろな空間技法が書いてありますが、これらも都市の中に実現したいと思う空間内容です。

横浜市内のいろいろな現場を見たとき、具体的なイメージとして建主や建築家などと交渉していく手段としたのです。

「都市デザイン」とは、別な表現をとれば「各種各様なコミュニケーションを装置化すること」ということができます。「孤独から共感」、「異質な人々の出会い」など、「人と人がどう触れ合うか」という舞台装置を、私は横浜での九年間、作っていたと思います。

たとえば、都会の中には、寂しいと感じている人がいる。そういう人がふらふらと街に出て来てもなかなか居場所がないので、私は後がしっかりと壁で囲まれ、前だけが少し見える、だから誰からも攻撃を受けない、それでいて皆をよく見るとことができる、あるいは広場を見渡せる空間を、市内にたくさん作りたいと思っていました。

私は、これを「群衆の中の孤独」といいますが、そういう状態から今度は多くの人と触れ合う、あるいは共感する広場をつくるなど、各種各様なコミュニケーションを装置化していくわけです。

また、私が働いていたとき、横浜公園に野球場、つまり横浜球場をつくるという話が出てきました。しかし、私は街の真ん中は緑にすべきだという思いが強くて、あそこに球場を作ることに反対でした。

田村さんは分かってくれましたが、作りたかったのは飛鳥田市長なのです。彼は、市民がお金を出して作った広島カープという球団や球場がありますが、市長としてはそういう市民球場を横浜に作りたかった。優勝した際に横浜市民みんなが盛り上がる、つまり作りたかったのは「市民の共感の場」なのです。そう意味では、飛鳥田さんも立派な都市デザイナーでした。

一人で孤独を楽しむ、二人で会う、あるいは三人、五人で会う、十人で会う、そういった各装置をいっぱい作るというイメージがありました。その時は、「コミュニケーション装置」を作るという言葉は出てこなかったのですが、かっこいいとか悪いとかという形の問題以前に、考えなければならない問題だと思います。

大テーブル主義

私が田村さんは素晴らしいと感じたのは、企画調整局で週一回開かれた全体会議ともいうべきものです。企画調整局は、横割組織であるといわれましたが、局内部で横割が成立しなければ、横割組織として機能しません。彼は、週一回、大きなテーブルに皆が寄って、会合を開いたのです。正式には「目標会議」といいましたが、企画調整局にとって実に大きな意味を持ったと思います。自分の経験を他人へ、他人の経験を自分の物にできると同時に、調整の要になっていたんです。

都市計画の攻めと守り

都市計画には、攻めと守りがあります。攻めは市民の税金であるお金を使って道路や公園などをつくる公共事業、守りは法律や条例、そして市独自の要綱などを使って、市民に守ってもらうルールの制定です。アーバンデザインとは、これらの攻めと守りの手段を使い、並行しながら街に「魅力」と「美しさ」を作り出す方法なのです。

県民ホール

横浜市は、はじめ県民ホールの敷地にわずかながら土地を持っていました。県がそこに県民ホールを建てたいから土地を譲ってくださいという要請が飛鳥田市長のもとに来て、田村さんのところへ来た。そこで田村さんから、「どういう条件を付けて県に売るべきかね」と聞かれたんです。

そこで、私はまずは建物を歩道よりも下げてくれと言いました。ここの歩道がほぼ五メートルあるのですが、植え込みの幅が二メートル以上ぐらい占めていて、人が歩けるところは2．3メートルしかなかった。これでは狭いものですから県へ県民ホールの建物を2．7メートル下げるように言ったのです。県民ホール前の歩道の木は、横浜市のもの、市民のものだから、枝を一本たりとも切ってはいけないと言いました。そういう条件で県に売ったのです。それがきっかけとなって建物は下がり、結局は産業貿易センタービルの広場と対になった「ペア広場」へとつながっていったのです。

図1：保存された旧英国７番館と拡張された歩行区間
資料提供＝横浜市

また、山下公園前の創価学会所有の古い建物（戸田平和記念館　※旧英国７番館）は、関東大震災以前に建ったレンガ造りの建物ですが、この建物を歴史的な資産として一部残してくれと創価学会に要請しました。その結果、創価学会の新しい建物は、下がって建てることになったのですが、その後、隣のホテルビルがあまり下がらない結果となってしまったので、創価学会から連絡があり、「隣に比べて創価学会の建物は下がりすぎた、これでは不公平なのでやり直すから、建物杭打ち費用を弁償してくれ」と言われました。そこで私は、五〇〇分の一の模型を作り、それを持って必死に説得したら、何のとか理解してくれました。**【図1】**

くすのき広場

くすのき広場ですが、これは地下鉄復旧工事の一部として建設されました。そのときも国吉君や内藤惇之さんと一緒に一週間で図面をつくって、道路局に持っていきました。しかし、できてからしばらくして、庁舎管理課から連絡があり、今くすのき広場で物を売っている人がいるので何とか、どかしてほしいと言われました。警察に言っても、そこは公道ではあるが、いわば市役所の中庭みたいなもので、警察と市役所の権限争いになりかねないので行けないと言われ、設計した岩崎さんが悪いのだから、そのような不届き者を排除

図2：くすのき広場
資料提供＝横浜市

すべきだと言われたのです。そこで、私もしぶしぶその人を説得し、辞めてもらいました。**【図2】**

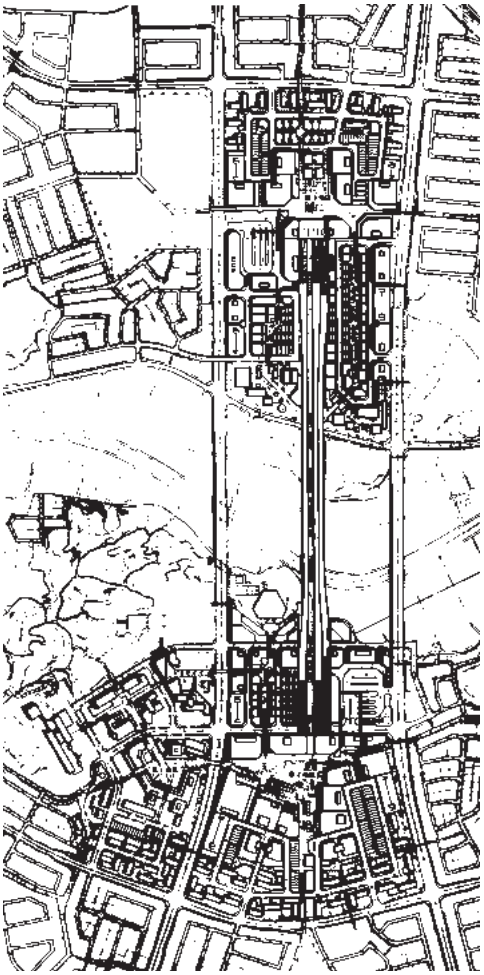
磯子駅前

磯子駅前広場を設計していて私が感じたことは、街の主人公である歩行者を擁護する人がいないということでした。周辺商店街やタクシー業界、交通局などさまざまな方面から欲求や意見が挙がったのですが、歩行者が歩きやすくして欲しいと言ってくる人がいないのです。そこで、私たち企画調整局が歩行者の代弁をするのですが、企画調整局に力があったのは、やはり市長に力があったからです。市長が田村さんを信頼して、田村さんが私を信頼してくれて、私が発言すると市長が言っているように聞こえるんです。だから意見が言えたのです。そうでないと、たちどころにやられてしまいます。

プロムナード計画と港北ニュータウン

歩道にタイルをはめ込む都心プロムナード計画でも、いろいろとありました。プロムナード計画の工事をしているときに、通りすがりの人から「あまり標識などは、作らない方がいい」、「横浜にきて、道がわからなければ人に聞くのだ」、「それによってコミュニケーションが生じるのだから、あまり標識などを作らない方がいい」と言われたのは、とても印象的でした。
次に港北ニュータウン。このセンター地区の設計にも関わりました。これは、日本住宅公団との主導権争い

図3：港北ニュータウン中心地区基本設計
出典＝『SD 別冊 No.11』、昭和５３年、鹿島出版



のようなところがありました。施工するのは日本住宅公団ですが、田村さんを含めて、私たち横浜市職員は街の自治体職員として、国の出先機関としての公団にやってもらうのではなく、私たち自身が責任を持つのだという強い自負を持っていました。私としては、その設計ができたときには、涙がこみ上げるくらいのエネルギーをかけて設計図を書きあげました。**【図3】**

日本大通り

また、日本大通りについても、長い間、ゾウの鼻（現：象の鼻パーク）、に国の倉庫が居座り、私も横浜

市を辞めてからも気になっていたのですが、今は海に開けた公園として、とてもスッキリしました。

横浜市を退職

私が横浜に在職したのは9年間でしたが、その後はアジアを中心に活動し、結局21年間、アジアにかかわりました。つまり、私にとっては、横浜よりもアジアとのかかわりが長かったのです。

横浜市を辞めたときは、「岩崎は、調子がいい時は横浜市にいたが、悪くなるとさっさと逃げ出した」とさんざん市職員以外の友人から悪口を言われました。私としては、国の機関で働いていた人が市長になり、その下で働くことには興味がなかったから辞めたのです。鳴海さんという飛鳥田市長の行政ブレーンだった人がいましたが、彼のところに相談に行き、私が市長に立候補するのはどうかといったのですが、「無理だね」と言われ、あきらめました。

国連の職員として

横浜市を辞めてから、国連の職員なろうと思い、まずは外務省に行って、所定の用紙に履歴を書いて申し込みました。その後、国連の部長というインド人から連絡がきて、面接を行い、すぐに正式な国連職員として採用されました。つまり、私は以前、ガーナという開発途上国に2年いて、その後アメリカの大学にも留学して少し英語もできるという状態だったのですが、そういう人は私の年代では少なかったのです。私は、何の特別なコネもない状態でしたが、日本政府は日本人の国連職員を増やしたいと思っていたので、簡単になることができたのだと思います。

しかし、国連に勤め出してはじめての日に、いきなり、「今、国連各国の総会が行われていて、お前は課長だから挨拶してこい」と言われました。9年間も英語を喋っていなかったので、部下のデンマーク人を連れて行って、「私は着いたばかりで、まだよく分からないので、今から私の部下が喋ります」とその場をごまかして、うまくすり抜けました。

こうして、私のアジア生活が始まったのです。私の役職は、セクション・オブ・ヒューマンセトルメント（Section of Human Settlement）の課長と云い、「人間居住課長」とも訳すべきものですが、実際はアジア各国のスラム改善が仕事となります。アジアでは横浜の都市生活の裏側にあるものを見た感じです。国連の職員として3年、そして国際協力のＮＧＯとして18年、合計21年間、アジアの現実に触れてきました。

横浜の活動が発展

これは横浜市の名誉のためにお話ししますが、国連に勤めていたある日、ハーバード大学から手紙がきました。私のハーバート大学における昔の先生が私に会いたいと言ってきたのです。お会いしてお話しを伺ったところ、ハーバート大学院のデザイン学部では学部長の改選が迫っており、貴方もその学部長候補に選ばれているというのです。学部長選出には、5人の教授で選考委員会が構成されており、その先生ともう一人、ジャクリーヌ・ティルウィットという私が習った女の先生もおられました。このティルウィットさんは若いときコルビジェのところで働いた経験などをお持ちでしたが、私がハーバートを卒業した後も横浜によく来られて、横浜での私の仕事を良く知っておられました。その彼女からも、「あなたを学部長にしたいのだけれど・・・」と言われたのですが、当時、私の興味はすでに都市、または都市デザインから離れ、アジアに取りつかれていたので、お断りしました。

国連を離れてからは、その後、15年、筑波大学にいましたが、教えることにはあまり興味がなく、日本国際ボランティアセンターという国際協力のＮＧＯをつくって、世界の開発途上国といわれる国々で長く活動しました。はっきりした問題意識と語学力があり、行動力に長けた若い人たちと協力して、難民救援、学校建設、農業改善など私にとつて魅力があり、有意義な年月を過ごしました。

目の当たりしたスラムの現状

当時のバンコクの都市人口600万人の内、約20パーセントはスラムに住んでいました。スラムの住民は土地を得ることが出来ないので、人が住めそうもない湿地等などに家を建て始めるのです。また、インドのボンベイ（ムンバイ）では、公道の上に掘っ建て小屋を建てて住んでいる路上居住者（Pavement Dweller）もたくさんいます。これらの住居は、私にとってもとてもショックなもので、都市計画を専門とするものとして、どうすべきか悩みました。

ですが、彼らは物理的には厳しい条件下にあるのですが、それでも生きる意志は強くあります。彼らが作った寺子屋のような学校には、先生が子弟を集めて教育をしており、社会的にはとても優れたところがあるのです。彼らは、昔は皆、農村に住んでいたのですが、洪水や干ばつ、あるいは戦争や紛争などで田舎には住めなくなり、やむなく都会に出て来ることになったのです。

先進国の都市と途上国の農村

私は国連職員として、このようなスラムの改善を目指して、何回も国際会議を開き、各国の経験交流を行いました。しかし、このスラムをよく見てみると、たとえ現在のスラムを改善しても、スラムの根っこは農村にあり、農村の問題が解決しなければ、スラム問題の根源的な解決はあり得ないことに気がつきました。

そこで、私の興味はだんだんと都市から農村に移り、農村の問題に取り組むようになりました。外国資本によって樹木が伐採され、水が枯れ、農民はその地に住めなくなる、あるいは、戦争や紛争が起これば、農村を追われて、結局はスラムが膨張していくわけです。

ある時、私はラオス国境に近い、タイの田舎を訪ねたのですが、皆さんしっかりした家を建て、立派に生活していました。その晩は民家に泊めてもらったのですが、その翌朝、山に行くことになり、山に入るとすぐに目に入ったのは、山が焼けている光景です。

トラックを改造した乗り合いバスに乗り、山道を行くと両側には焼けた山の光景が続くのですが、その終点に山岳民族の集落があり、その周りには緑がいっぱいありました。

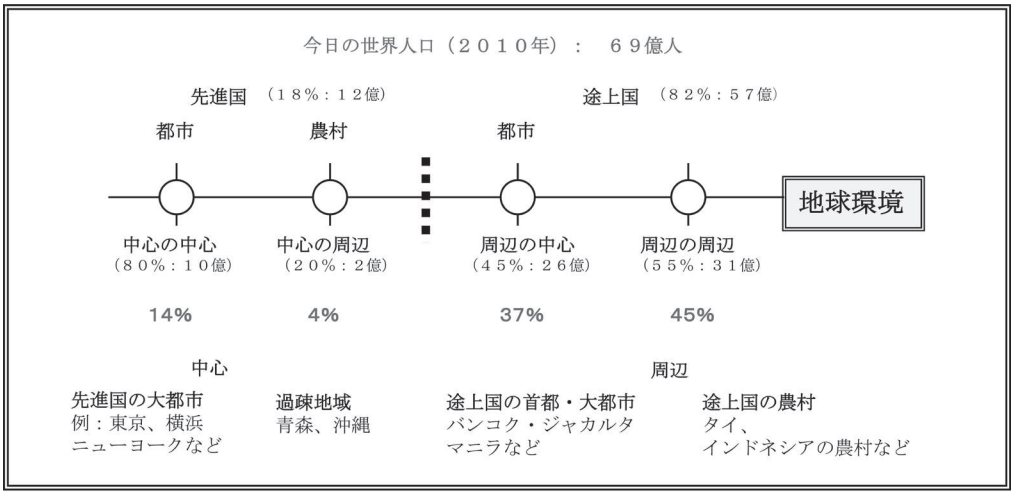
さっそく村長に会い、「どうしてこんなに山を焼くのですか」と聞いたところ、彼は「私たちが焼いているわけではない。昨日あなたが泊まった村の人たちが焼いているのだ」というのです。村の人たちは、近くの大きい街の人たちとつながり、さらにバンコクを経由して東京の資本と結び付き、日本の需要で動かされているのです。焼いた後どうするかというと、トウモロコシを植え、日本などの先進国に輸出して、豚や牛などの飼料にするのです。トウモロコシを刈り取った後、雨期になって雨が降ると土壌が流れ、環境が著しく破壊されて行きます。いうなれば、私たちが今晩、豚肉を食べれば、その豚はタイからのトウモロコシを食べ、そのトウモロコシはタイの森林を食べているという形で、私達自身がタイの山の環境破壊としっかりとつながっているのです。私達の豊かな都市生活の裏には、こういう現実が隠されているだと気づきました。

都市の紙

ユーカリというのは、オーストラリアの原産でコアラが食べる木ですが、紙の原料になります。植えてからの成長が実に早いのですが、急激に水を吸い土壌を劣化させていきます。何年か続けていくと土壌がひび割れ、二度と畑として使えなくなります。

はじめ農民は、短期間で成長する樹木を切って売れば、現金収入が得られると思い、政府の勧めるままにユーカリの苗を植え付けて行ったのですが、土壌を劣化させると知って、タイ政府の政策に反対するようになり、バンコクまでのデモ行進を計画しました。しかし、警官や機動隊に押し返され、無理やり解散させられています。日本の製紙会社15社は、このユーカリを紙の原料として買いつけています。私には結局、日本での豊かな物質生活がタイの警官によって守られているように感じられました。

図4：世界の構図
資料提供＝岩崎駿介



2008年、都市人口の総計が初めて世界人口の
半分を超え、2010年には５１％になった。

世界の構図

このように世界各地を見て感じたことは、先進国と途上国、都市と農村との対立といいましょうか、ここに示すような世界の構図です。**【図4】**この図においては、まず先進国と途上国とを分けます。先進国に住んでいる人は少なく、世界人口の18パーセント、五人に一人。五人に四人は開発途上国に住んでいます。先進国にも途上国にも、都市と農村がある。そのように分けていくと、今世界人口のうち、37パーセントは途上国の都市、14パーセントが先進国の都市に住んでいます。横浜、我々はここにいるわけですよ。東京、横浜、日本の周辺、青森や沖縄、バンコク、ジャカルタ、マニラ、タイやインドネシアの農村などを区分して、結局はこのように「中心の中心」、「中心の周辺」、「周辺の中心」、「周辺の周辺」といった四つの地域に分けて、ここに地球環境を置く、という物差しを自分で作りました。

私が横浜市に入った1970年の世界人口は、37億なんですね。今は69億人。2050年は、国連推計の中央値で91億です。多い推計では104億かもしれない。私が横浜市に入った時から40年たった今、ほぼ倍になっているわけです。だから、世界は変わっているんですよ。

しかし、今後はこんなには増加しないでしょう。推計中央値の91億であれば、22億人の増加、推計最低値の79億であれば、わずか10億の増加が予想されています。

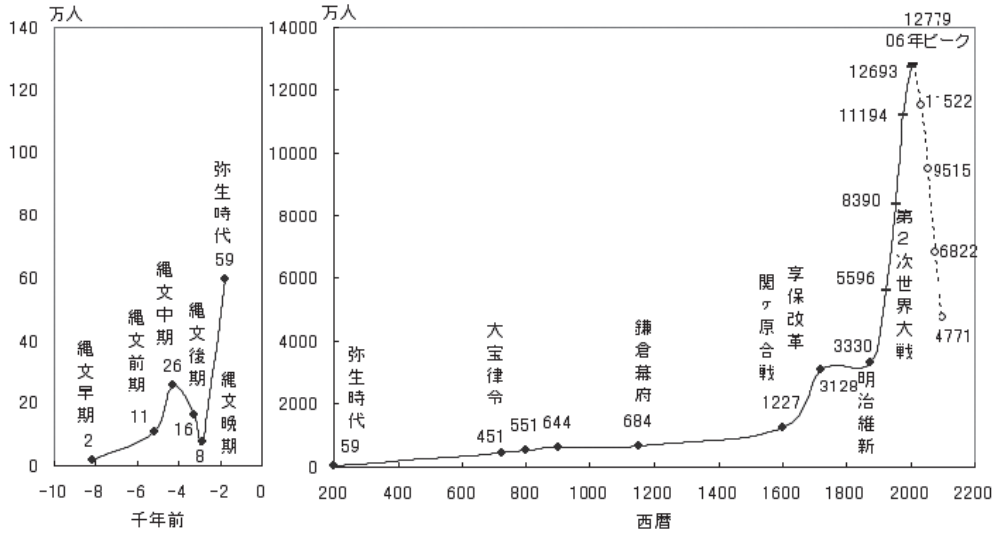
じゃあ、増えた人口がどこに行くか、それは途上国の都市ですよ。今後の世界の大都市圏を見ると横浜は東京圏の一部で、これは3500万人。とても大きいのです。その他、ニューヨーク、ロサンジェルス、モスクワ、パリ、シカゴ、ロンドン、それに日本の阪神、これらが先進国の大都市圏で、あとはすべて途上国の都市で占められています。

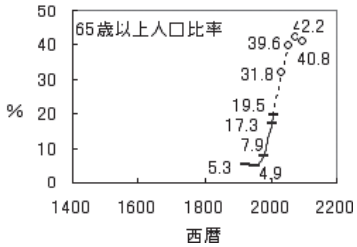
世界の都市人口は、2年前に初めて世界人口の半分を超えました。昔は、農村人口が圧倒的多かったわけですが、今は世界の51パーセントの人たちが都市に住んでいる。

ではなぜ今、この図を使って話しているかというと、横浜が今後どうなっていくかを考えたいと思ったからです。日本では120年前後で人口が3倍から4倍に急激に増えました。明治維新の時は3300万人で、人口問題研究所によると2100年ごろには4700万人に戻るというのだからドラスティックに減少していくわけです。横浜はこの推計をみると、2050年でもほとんど変わらない。

図5：日本の人口推移
資料提供＝岩崎駿介

人口の超長期推移





（資料）
明治維新までは鬼頭宏「人口から読む日本の歴史」(2000)（″・″）
1920年、50年、75年、2000年は総務省「国勢調査」、2006年は総務省「推計人口」、（″－″）
2030年、2050年、2075年、2100年は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（2006年12月推計）」の出生中位（死亡中位）推計（″-o-″）

この図【図5】のように世界を見てと、これら四つの地域には、それぞれの問題がある。「中心の中心」ではどうか、「周辺の周辺」ではどうかなど、それぞれ地域で、どういう問題が起きているかを考えなければならない。

この4つの地域を互いに結びつけているのは、先進国の経済ですが、先進国の経済とはまず途上国から資源を持ってきて、資本の蓄積と熟練した技術や労働力を使って生産し、途上国も含めた市場の拡大を行うという大規模な物質循環になっています。私たちの生活は、この大きな物質循環にぶら下がって成り立っている。私は、物質循環のほかにもう一つの循環を考えているのですが、それを精神循環と呼んでいます。精神循環とは、たとえば横浜の住民が、自分の生活を支えているこのようなシステムや関係する人々との関係をどこまで理解しているかを言い表しています。世界の人々の生活は、互いに深く結び付いています。互いに繋がるというか、社会は繋がっているわけです。しかし、実際は日本人の理解が国境を越えて広がることができず、関心は常に国内にとどまっています。このように人々の物質循環と精神循環がずれているということは、非常に危険で不健康なことです。私は、このズレが日本の深刻な社会病理を生み出している最も大きな原因であると思っています。

地球環境問題については、直接的な破壊と間接的な破壊とに分けて考えています。直接的な地球環境破壊とは、先進国が作り出す工場からの排気ガスなどによって上昇するCO_2濃度やフロンガスの問題です。温暖化の問題。中国もインドも排出しているが、基本的には先進国の問題です。間接的な環境破壊とは、

森林破壊や土壌流失、砂漠化の問題です。私は、温暖化の問題より、この砂漠化の問題の方が深刻だと思っています。これは一般に途上国の問題だと思っている人が多いが、実際は、先程のユーカリ植林やトウモロコシ栽培で見たように先進国の需要に基づいて発生している問題であり、したがってこれも基本的には日本を含む先進国の問題です。

例えば、タイの森林は、18世紀、つまり200年も前からイギリスが、まず船を作るためにチークなどの良質な材木を持ち出した。戦後は、日本などがラワンなど大量の木を持ち出した。そうすると道ができるので、今度は現地の商人が入っていき、残った材木を持ち出す。そして最後に換金作物を栽培するため、すべて焼きつぶして再生不能にする

我々の生活が、直接的・間接的に地球環境を痛めつけていながら、多くの人は、現地の人が悪いと勘ちがいしている。こうなると、どうしようもないというか、先進国の人の生活を改めないとまずいと大きな声で叫ぶが、誰も関心がないというのが現実です。

次に、これはニューヨーク・マンハッタンの昼間人口密度を表した模型というか写真**【図6】**です。この模型が美しく見えるのは、この高さを支えるために周りには大きなすそ野の水平面が広がっているからなのです。つまり、都市デザインも含めて、都市の魅力や成熟した美しさなどというのは、都市以外の農村の、あるいは先進国ではない途上国の人たちの支えによって成立しているのです。したがって、次の絵**【図7】**で表現しているように、都市が花のように咲くには、この木を支えている土壌、広い農村とか、第三世界といわれる人々の働きによって成立している。皮肉にもこの木、つまり都市そのものは、倒れかかっていますが、先進国の都市における社会病理は、今後ますますひどくなると思います。これが私の正直な実感です。

また世界の富の偏在は、世界人口を収入によって五つに分けると、一番上に日本人全部入って、82パーセントの世界の富を持ってきているわけですよ。その小さい残りを世界中で途上国の人たちで分け合って生きている。これほど我々は特殊な位置に生きているんです。

図6：ニューヨーク・マンハッタンの中間人口密度ダイアグラム
資料提供＝岩崎駿介

図7：先進国と途上国の関係
資料提供＝岩崎駿介

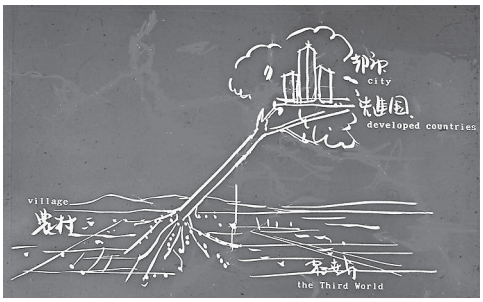


図8：都市のコミュニケーション（バンコク）
資料提供＝岩崎駿介

飢餓人口をみると六秒に一人、子供が飢えを原因として命を落としている。つまり、私たちは他人の食糧を食べ、他人を殺して生きているといっても過言ではないのです。我々の都市の豊かさを持つために、周辺の周辺では6秒に1人が死んでいます。

私は、あるとき革新系の党首が「私は、戦争が嫌いです」と言っていましたが、今この瞬間にも人を殺しているのに、「私は、戦争が嫌いだ、人殺しは嫌いだ」などと、よくもそんなのんきなことを言っているなと思いました。

コミュニケーション装置

私は、先ほど都市デザインとはコミュニケーション装置を作ることだと云いましたが、これは私がバンコクで撮った写真**【図8】**です。この写真には、都市デザインの神髄が映っていると思います。なぜかと言うと、このソバのどんぶりを持っている女の子と、通りすがりの水兵さんとの関係です。これが都市だと思うんです。要するにコミュニケーションが成立しているわけですよ。ただの通りすがりですよ。互いに譲りあい、互いのことを気遣いながら、自分の楽しさというか、行為を完結しようとしている。そういう関係性がいたるところに生じるという、このことが魅力的な都市だと思うんです。

ところが、現代日本では、都市は「出会いの場」から「疑惑の場」ともいうべき、見知らぬ人を疑うという空間になり下がってしまった。ようするに今、小学校では見知らぬおじさんに声をかけられたら、一目散に逃げろと教えている。このような中で都市デザインは本当に成立するのか、私にはとても疑問に思えます。

グローバリゼーション

グローバリゼーションとは、国の障壁を取り除いていくことを意味している。そうすると、私たちは常に世界中の人と過酷な競争をしなければ生きていけないようになります。同じマーケット、同じ雇用の枠組みの中で争って生きていかなければならない。

しかし、一概にグローバリゼーションは悪いかというと、それはある意味で必然的な歴史の流れで、止めようがないことでもある。したがって世界化の過程に中でも、それぞれの国の人々が急激な変化にも耐え、安心した生活を送ることができるように考えて行かねばならない。

これは寓話なのだけれど、ある日アフリカの王様が日本に来て立派なホテルに泊まった。ホテルの部屋で水道の蛇口をひねったら、水がたくさん出てきたので、彼は部下に「この水道の蛇口をたくさん買って水に困っている我が集落に配れ」と言ったのです。つまり彼は、この蛇口が裏で水源とつながっているとは思わなかった。これと同様に、日本で生活していて、欲しいものをただポンポン口に入れていると、それらがどこから来て、どういう流れにつながっているかがなかなか見えない。

今日皆さんが食べたもの、あるいはこれからも食べるもの、今、日本の食料自給率は40パーセントです。皆さんの身体の細胞の60パーセントは外国製、つまり60％は外国人なのです。60パーセントが外国産だけど、気持ちや理解、心は100パーセントの国産、自分の国のことしか考えられない。このギャップ、つまり「大きな身体に、小さな心」の問題を解決し、「小さな身体に、大きな心」を実現しなければ、ほんとうの都市デザインも成立しないように思います。

精神循環と物質循環のバランスを訴えるため選挙へ、

私は、このような考えを世間に訴えようと、10年前に国政選挙に二度、出馬したのですが落選し、それで人に訴えるより、自分の食べるは自分で作ろうと、女房と二人で自給自足の基地づくりを始めました。コメを作るのはいいが、今度は住む家がないと思い、家をセルフビルドで作り始めました。8年かかって最近ようやく住めるようになったのですが、自力建設するのは、ただお金が十分でなかったからです。

自給自足の基地を作る

選挙に落っこちて考えたことは、20年の休戦し、自分で食べるものはできるだけ自分で作る、豊かな自然を増やす。そして住む家もなかったから、自力で作る。8年間、女房とほぼ二人だけで作ったのです。私は30年間全く設計も、そしてもちろん大工などもしたことがありませんでしたが、それでもしっかりと母屋は完成しました。

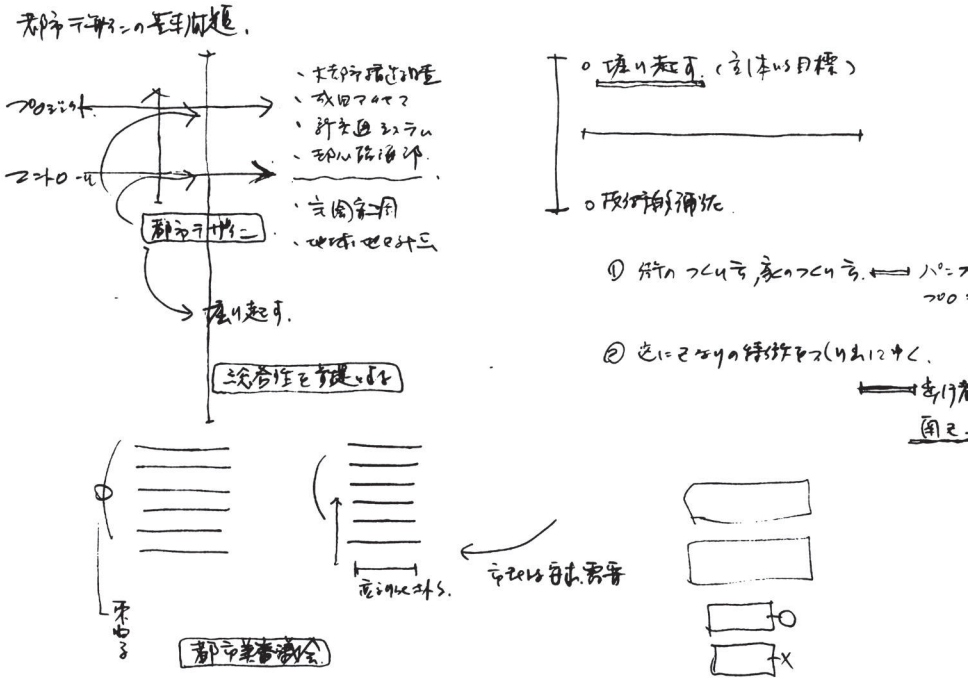
見知らぬ人をも信頼する

最後に、「アメリカの先住民」という本から、レッドマン（Red man）と呼ばれる先住民族についてお話します。その一部を要約しますと「私達先住民が息絶えれば、私達民族の記憶は白人たちの間に語り継がれる神秘な物語になってしまうだろう。そして、あなたの子供達のそのまた子供たちは、野原で、岸辺で、街の店で、あるいは道なき森の静寂の中で、寂しく思うときがあるかもしれない。しかし、彼らは決して一人ではない。心配することはない。私たちは永遠にこの美しき国を愛し続けているから」とあります。これは要するに、アメリカのインディアが殺されても、魂が帰ってきて街に満ち溢れているので、白人たちは一人ではないよ、と言っているのです。

なぜ、私がこの文章にひかれるかというと、見知らぬ人を含めて田の存在を「信頼する」ということを言っていると思うからです。人を信頼するという環境は、活力が存在し、さらには都市の魅力が存在すると思う。いい都市空間を作るには、いい人間関係を作っていかなければならない。今は、すぐに怒って殴るなり殺したりするけれど、アメリカ先住民は自分たちが殺されてしまっても、なおも相手へ「寂しく思うな、俺が助けてやるから」と言っている。

彼らは、自分たちは自分たちだけで生きているのではなく、ほかの人やほかの生き物と深くつながって生きていると考えていたのだと思う。われわれは、ミミズと直接的な関係はない。しかし、ミミズが土壌を作り、土壌から樹木が生育し、その緑を私たちが楽し

図9：都市デザインの構想
資料提供＝岩崎駿介



むという意味で、私達はミミズと深い関係にある。私たちは、結局、皆つながっているのです。

私たちが食べているものは外国から来ているのだから、横浜には国際広場などをつくって積極的にインターナショナルな関係をつくるべきです。さらに言えば、あるアメリカ人が言っていますが「都市内では自動車の使用を辞め、すべて自転車で移動すべきだ」と言っていますが、これも実に面白いと思う。時代の流れにも沿っている。

皆さんは、これからの40年、2050年に向かって、ゆるぎない魅力ある都市「横浜」を作っていただければと思います。

今日は、どうもありがとうございました。

岩崎先生による都市デザイン

鈴木：横浜の都市デザインは、これまでの計画が概ね実現でき、次の展開を考える時期にきていると思います。逆に当初、考えてきたことが、おぼろげになっています。当初、何を考えていたのかを再考し、その上で、次の展望を見つけなければならないのです。

実は北沢先生と、「アーバンデザインはどのように始まったのか」と調べていたときに、岩崎さんのスケッチを見つけ、都市デザインの基本問題についてメモがあったのです。メモには「プロジェクトとコントロールなどを一体に考えていくのが都市デザインである」という整理がされていました。また、横浜の都市デザインの構想について、企画調整局の組織的な位置づけは、デザイン審査会のように意識決定の仕組みであると北沢先生と考えました。一点目の質問は、このスケッチ**【図9】**のような構想に至ったお話を頂きたいです。二点目は、岩崎さんが横浜のまちを徹底的に歩き回って、道の特徴や地区の可能性を調査された理由です。当時の資料には、岩崎さんがつくられたボストンの都市構造を表したダイアグラムがあり

ましたが、恐らくこれに基づいて岩崎さんが横浜での活動の初期に各地を調査されていたと思います。

三点目は、港北ニュータウンの公開空地等、市街地環境設計制度のモデルについてです。産業貿易センターや石川町を想定されたスケッチや公開空地の係数のモデル、さらに中山などの郊外や、また密集市街地の図も見つかったのです。当時、市街地環境設計制度の構想は都心のみならず、様々な地域の構想をされていたのでしょうか

岩崎：そうです。市街地環境設計制度では、都心部ばかりやっていては悪いなと思っていたので、色々な地域を想定して考えました。ボストンでは、たくさんの図面を作りましたが、今では一枚しか残っていないようですね。この図（質問１点目の図面）は、おそらくＳＤという雑誌に載せるために書いたのだと思いますが、昔の記憶はあまり定かではありません。当時の企画調整局は、皆が一緒にやるのだ、何でもやるのだ、という思いが強かった。田村さんは、建築学科と法律学科出身で、図面を描きますし、とても法律に詳しい人です。

また、小澤（恵一）さんは私の隣にいて、その向こう廣瀬（良一）さんがいて、みんな課長級として並んでいるので、課が互いに協力してやるという組織であったと思います。プロジェクトは、税金を使って事業を興し、コントロールは法律や条例等のルールを定めるわけですが、この二つがなければ、デザイングループのわれわれが「こうしたいんだ」と言っても計画は進められない。だから、プロジェクト、コントロール、そしてわれわれも常に一緒にやっていく感じはありました。

国吉：「都市デザイン」は「デザイン」のみで進められるものではありません。そのころの企画調整局の主流はプロジェクトとコントロールであり、その活動に都市デザインチームが加わった形で、はじめてデザインを進めることが可能だったと思います。

岩崎：その当時、私は「景観」という言葉が嫌いでした。「景観」とは恰好ばかりを意味し、都市デザインが目指そうとしていたほんとうの意味を言いあらわしていなのです。ですからたくさんの人から「岩崎さん、何やってんの？景観、つまり格好ばかり考えているんでしょ。それは贅沢ですよ」とよく言われました。僕らが目指していたのは、都市生活の魅力や美しさであって、単なる格好ではないのです。

鈴木：これらの図面をみると、市民的な要求の取り入方を考察しており、興味深いです。都市デザインの位置付けには総合性が前提にあるのかなと思いました。この図は、当初ＳＤのスタディのための図かもしれませんが、都市デザインのあるべき姿等、定義をされたのは岩崎さんが最初ではないかと思ったのですが。

岩崎：いつもそうですが、その当時も無我夢中でやっていたので、このようなモデルケースに至った経緯を、どうしても思い出せません。

鈴木：その他にも、各区の特徴を示された資料があります。これは、後に80年代の「区の魅力づくり」という形で展開していくのですが、それに先駆けて1970年代にイメージ（計画）や考えが示めされていると思われます。

岩崎：私は都心部ばかりを手掛けたかったわけではありません。当時は「都心のいいところ（関内周辺）ばかりやって」と疎まれたものでしが、郊外の魅力についても依託調査をしたりして手掛けていました。

国吉：都市デザインチームは、当初わずか２人でしたので、横浜市へ影響を与えるにはまずは関内に集中してやるしかないという感じだったのです。

岩崎：それにしても、このスケッチ（ダイアグラム）には「掘り起こし」「技術的動作」等とも書かれているけれど、経緯がどうしてもわからない。このスケッチは浅田孝（環境開発センター）が来た時の資料かな。どうしても、この質問は、当時のことが思い出せないので答えられないです。

図10：都心部業務地区開発の可能性
資料提供：横浜市

図11：ボストンの PUBLIC FRAME WORK MODEL

鈴木：では、岩崎先生が横浜でされた最初の作業**【図10】**について、お話いただけますか。

岩崎：
この図面は、国吉君が横浜市に入る前かもしれない。当時（横浜市入庁初期）、休みの日に軽自動車で家族を連れて、横浜中を見て回りました。この図で表しているのは、波線が歩行者、実線が自動車ですが、歩行者と自動車を明確に分離させた方がいいと思い、歩行者のネットワークをつくりたいと描いた図です。図は主要な建物や公共施設に色を付けて示しています。ボストン市役所にも歩行者ネットワークを示す図面**【図11】**があって、それには歩行者用のルートや高速道路も描いてあり、歩行車と自動車との分離についても描いてあります。

それにしても、当時のことは詳しく思いだせないですね。過去のことはすぐに忘れてしまって、これからのこと、未来の事はいくらでも話せるのだけどね。

市街地環境設計制度

鈴木：市街地環境設計制度に関する資料には「特別地区」という特別にエリアを決めて、そこをどのように使うかという提案をされています。今で言う「街づくり協議地区」の原型が岩崎さんの提案にあると思うのです。例えば、ある通りではセットバックをし、建物の高さを基準より高くてもいいから公開空地を設ける等という内容が描かれています。これが市街地環境設計制度の発想につながったのではないかと考えています。

岩崎：その他に、みなとみらい21地区のスタディーもしました。横浜の都心部は横浜駅周辺と関内周辺の2つの地区があって、これらをどのように組み合わせていくかというものでしたね。この図面の計画は、実際には実現しませんでした。

この計画をなぜやったかというのは、「歩行者をどうするか」や「緑を多くする」という目標から出てきたと思います。その具体的な方法がさきの「美しさへの空間的技法」にある「群衆の中の孤独」とか「閉じた空間」と「開いた空間」との対比などの原則を現実に適応させていくことです。この方法は、ボストンなどで学んだわけではなく、横浜ならではのイメージとして僕が考えたものです。イメージを決めれば、形はおのずと出てきます。しかし、どうのようにしたいのかのイメージがないと、形が出てこない。

ですから、僕は形の話ではなく、イメージのもとになるような話をしたいのだけど、みんなすぐ、丸とか四角とかの形の話をしたがるね。そうではなくて、どうしたいのかのイメージや意志があれば、自ずと形が出てくるんです。

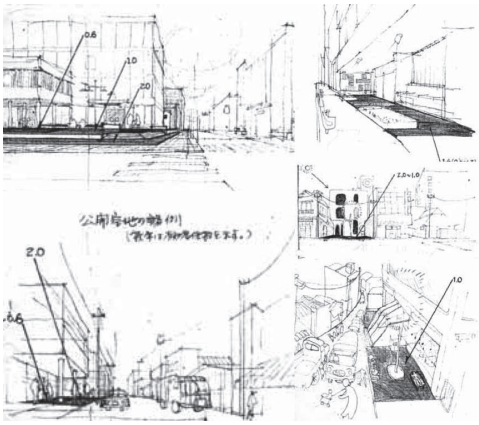
鈴木：当時、岩崎さんや、みなさんが横浜の都市をつくられた背景や意義を理解した上で、次を考える必要があるのです。今の横浜市は現状の制度に手を加えて、細かい部分の調整ばかりでいると思いますし、本来の意味が消えてしまう可能性があると危惧しています。

岩崎：そうですね。都市の計画は、一言で言うと「コミュニケーションの装置化」と言っています。先日、中山美穂という女優が書いた「なぜなら　やさしいまちが　あったから」（集英社）という本を見つけたのだけれど、この題名から僕が連想したのは、「一人でいても寂しくない街」というイメージでした。だから、「街が人へ優しくしてあげるような」そのような街をつくりたいと僕は思っていたのです。そのためには、歩行者の安全を守る空間が必要で、それを成し遂げたいと強く思ったんです。だから、形はイメージや「何をやりたいのか、成すべきなのか」という気持ちさえあれば、出てくると思います。

鈴木：
市街地環境設計制度の発想は、どなたのものでしょうか？

岩崎：恐らく、田村さんではないかな。僕はボーナス制度の意味はよく理解できた。

図12：公開空地の略例（市街地環境設計制度）
資料提供＝横浜市



建物とアクティビティインフィル、つまり各ビルの活動というのは、道路の影響が大きい。各建物や活動は、道路にぶら下がっているようなものです。ですから、道路は建物の活動容量を支え、かつ規制していると思います。だから。田村さんの提案である公開空地の提供に対して、「ボーナス」というか建物の高さ規制の緩和や容積率の緩和というというやりとりするという制度をつくることを僕は理解できたのです。そこで、ボーナス制度（市街地環境設計制度）を形にして、現実に適応させました。

ボーナス制度（市街地環境設計制度）の係数については、総合設計制度という建設省が出した制度があり、それを参考にした「横浜版」です。僕が作成した「係数の断面図」は、各状況に応じた係数を示しています。この方法はボストンでも同じようなモデルがありますが、ボストンの場合は係数ではなく状況や環境に応じて、建物の形状等を要求する条件としてこのようなモデルを使っていたと思います。**【図12】**

国吉：今でもこのモデルは一部を改善して使っています。岩崎さんは一貫してアメリカ型のアーバンデザイン、つまり公的に貢献したものに対してボーナスを与えるもシステムといヨーロッパ型ではないと当初から言っていましたよね。なので、固定的に考えるのではなく、各建物と敷地の関係を大事にした方が良いという考えでした。

岩崎：そうですね。浅田孝が言っていたことだけど、アメリカのダラス市では建築基準法はなく、全てを特別審査しているので、横浜も同じようなやり方がいいと言っていました。だから、できるだけ「個々のケースに合わせる」という方法が好ましいと思います。

鈴木：記録に残っていませんが、桜木町駅前の「ぴおシティ（築1968年・正式名称；桜木町ゴールデンセンター）」というビルについて田村さんからお話を聞いたことがあります。このビルは環境設計制度をつくる以前に建てられ、「高さ規制」が存在する頃の建物ですが、歩道を広く取る代わりに高さの緩和する方法をしたと聞きました。また「このシステムを制度的に確立したいと思って、この市街地環境設計制度を作った」とお話されていました。

岩崎：田村さんがおっしゃっているなら、そうだと思います。

国吉：でも、ニューヨークのシステムは岩崎さんが詳しかったと思いますよ（ニューヨークの61年のゾーニング制度改訂等）。

岩崎：どうだったかな・・・。当時は既にアメリカでボーナスシステムが発達していたと思う。だけど、僕がボストンにいた時に、直接的にボーナスシステムを学んだかは記憶にないんです。

国吉：ボーナス制度はニューヨークから始まっているようですね。

鈴木：私たちの考えは、岩崎さんがニューヨークの61年のゾーニング制度改訂を見られ、それを模して考えたと思っていたのです。

岩崎：いや、そんなことないですよ。ボーナスシステムについて論理的に考えることはやったけど、僕はどこかで教わった記憶が殆どありません。

やっぱり、これは田村さん考えたのだと思う。田村

さんは日本生命という民間会社にいたから、「ボーナス」というやりとり、つまり民間と公共側のやり取りのイメージがあったのだと思うよ。だから、それを僕に指示して、僕も納得をして、僕が形にしただけなんです。僕は修士論文で空間について明確に論理化したので、この理解の助けになったと思うのです。

国吉：市街地環境設計制度は山下公園周辺地区から実験的に始めてみましたね。

横浜を離れてからの活動

質問：岩崎さんは、今はしばし休戦ということですが、今日のお話からも、岩崎先生のとても活発な活動が伺われました。実際に横浜を離れてからは、どのような活動だったのでしょうか。

岩崎：長くＮＧＯ活動をやり、日本政府の方針に疑問を持つこともあったから、たくさんの提言をして政府に持って行きました。でも、受け取った課長などは「わかりました。何とかしてみます」と言うだけで、5年も経っても何も変化がないのです。色々な努力が実らない、地球環境問題もさらに厳しくなっていたし、南北問題もテロが起きた。僕の言ってることに、誰も耳を貸さないので選挙に出たのです。東京と新潟で出て、落選したら「疲れたな・・・・」という感じがありました。当時、女房がカンボジアにいたので、私はカンボジアへ行き、一年間は休み、その時に今の自給自足の生活をイメージしたのです。

これからの社会

これからの20年間は、あらゆる人の努力に関わらず世の中は、それほどいい方向には転がらないと思う。それは努力が足りないということではなく、歴史の流れのようなものであると感じている。僕が自給自足の活動を始めた理由の一つに、これまでと同じような活動を続けていたら、僕は愚痴っぽくなるかなと思います。僕はそれが嫌なのです。愚痴なんて言うより、生きているエネルギーを使うなら、ここで別のものに生かそうと思いました。こういう建物を作っていると「息子さんに譲るんですか」なんて言う人がいて、さらに息子は「これ売ったら、いくらになるかな」なんて言うし・・・。

今、自宅の納屋などの二棟目を作っていますが、僕の計画では合わせて三棟作りたい。その中心に中庭を置き、山に向かって建物をコの字型に三棟建てたい。僕の弟が、僕がこれまでやってきたことに敬意を表して、経済的な支援をしてくれました。

この自給自足に近い生活の理由は「世の中は、あまり動かない」、「愚痴を言いたくない」「やる以上、この三棟が建った時、現代の桂離宮と思われるほど歴史を超える建物を作りたい」ということなのです。僕は一応1000年生きるつもりでいるですが、息子には「俺が死んだら、お前たちはこの建物を管理できないから、建物を残してくれる金持ちにさっさと売っちまえ。」と言ってます。一番良いのは「市」に寄付して、誰でも遊びに来られる場所・空間となるのがいいな。僕は作る以上は良いものを作らなければ申し訳ないという思いが強くある。作らないのであれば何も問題はないが、作るとすれば、何も無いところに何か作るのだから「無」から「有」が生じさせることです。だから、醜いものを作ったら申し訳ないと思う。少なくとも、あと12年間は、三棟を建てて、中庭を作り、そして12年後の完成の時に、中庭に座ってみたいと思うんです。

僕は横浜からアジアに出て、いろいろと経験したけれど、僕はいつも世の中に対して自分の意志と力によって社会を変えていくイメージがあった。しかし、それはとても難しいことだった。それならば、地球の全体というわけにいかないけれど、小さくてもいい、ここだけでいいから、歴史を超える生命力を作りたいと思っているのです。僕の建物はきっと、歴史の流れの中で誰かが必ず壊す場面がやってきます。でも、「なぜ、桂離宮が残ったのか」と考えると、建物自体に力があるのだと思うのです。僕たちは貴族ではないので、いずれ建物は壊されてしまうかもしれないけど、時代を超える力を建物自体が内包していれば、波を乗り越えられると考えています。

僕は自然の中で、自給自足の生活を送っていても、世の中の動向、社会の変化に関心は強く持っています。例えば、鳩山首相が提言した CO2を25%削減させる提案は、無理かもしれないけれど努力をしようと言っているように僕には聞こえ、このような考え、何かをしようとする動きには賛同です。だから、これから大きな社会変化に直面すれば、家づくりを放ってもいいから参加したいと思うかもしれない。

質問：一般的に「自給自足」は家庭菜園のようなものを想像しますが、物を作り出す、あるいは家をつくることにも、とても興味を持っています。

岩崎：まさか自分でも、こんなにゴツイ家をつくるなんてイメージは無かったんだよ。でも家を作るということは、「無」から「有」を生じさせることだから、良いものを作らなければならない。だから、いつの間にかこうなってしまった。自分の手で大工をやり、セルフビルドしているのは、ただ金がないからなのだけど。

国吉：この地域は、昔の八郷町の建物様式を取り入れた建物が多く残っていますよね。

岩崎：東京近郊でこんなにも昔の雰囲気が残っているのは珍しい。八郷には茅葺もまだ残っている。僕がつくる建物はこの地域にある蔵の様式を少しまねています。40年ぶりに設計したけど、よくできたなと思う。

質問：今日のお話で私が衝撃的だったことは、岩崎先生が理想の都市デザイン像として映された光景がバンコクの写真に出てくる「歩道に出された屋台を手伝う少女と通りかかりの水兵」であり、あの光景は中区の中華街にみられるものです。日本の道路行政では「不法占拠だ」ということになってしまいます。横浜では、このような人に対して、歩行者からも苦情が出るなど、撤去させることが我々の悩みなのです。ですから「これが理想だ」（バンコクの写真）と提示され、私はショックを受け、舗道の不法占拠等を改善する必要に疑問を感じたのです。

また、お話にあった「精神循環」についてですが、中区は人口の11%が外国人を占めています。この中には区内で商売等の活動もあって、ひょっとしてこの傾向は「理想の都市デザイン」に近づいているのかなと思ったのです。もしこれが理想とすると、人と人との関係、舗道空間、或いは外国人によって私たちが異文化を身近に感じるのも「精神循環」の一つであると思いました。そうなると今、私たちが行政実務として取り掛かる路上問題は、岩崎さんの考えでは理想に近いものとして捉えることもできるのです。

そこで質問ですが、お話の中で「国際広場の建設」とあり、これはいわゆる国際交流センターのようなイメージではないかと思うのですが、具体的にこれからの日本に必要である「国際広場」「国際フォーラム」のイメージをお教えいただきたいです。

岩崎：まず、先ほどのバンコクの屋台の写真なのですが、確かにバンコクには屋台がたくさん出ていて、実は行政が撤去させる意向を強め、だんだん少なくなっています。とりわけ、日本の道路行政では、道は通行の用に供する場であり、決して立ち止まったり遊んだりしてはならない空間なので、すぐ排除したがるのです。

しかし、この写真で僕が特に言いたいのは、人と人が触れ合う空間をどのように作り出すかということです。先ほどの「国際広場」は、遠いものを身近に感じさせるためのものであり、日本は昔から遠いものを象徴する空間手法が歴史を辿ると多くあったと思います。空間を演出して、遠いものとのつながりを示すような場として使う。

僕が都市デザインの重要な目標と考えていることの一つに、「遠いもの」、「過去のもの」、「未来のもの」をどうやって感じさせるかというのがあります。僕はかつて、毎日のように飛行機で移動をしていて、地球は丸く、互いにつながっていると感じていました。普通は、平坦な地域に暮らしていれば、地球が丸いとは感じられません。僕が、その解決として考え出した方法は、海岸に1キロくらい長い装置を作って、片方からレーザービームを水平方向に出し、すると地球が

丸いのでレーザービームの地面からの高さが海辺を歩くにしたがつて異なり、地球は丸いと実感できると思ったのです。

もう一つは、世界の歴史は弱肉強食で、先進国では食べきれないのに、途上国では食べるものも十分でなく、6秒に1人、幼児を死亡させてという計算結果が出ています。しかし、私たち先進国の人たちは、それをほとんど理解せずにいます。例えば、猫をたくさん殺して三味線を作る人は、年一回猫をともらう行事をされています。これは、自分が生きるために猫を殺しているということを、みずから確認しているのです。

ですから、僕の言う「国際広場」は、遠い存在となってしまった魂を集める、あるいは今遠くにいるけどわれわれのために苦しんでいる人たちに敬意を表する場として作る、言いかえれば、地球上の様々な人や世界の存在をできるだけ身近に感じさせる空間として作るというイメージなのです。

いま、向こうから人が歩いて来て、僕をいきなり殴ったとする。僕は「どうして殴るんだ?」と言うと、相手は驚いて「殴りましたか」という。確かに、相手の拳が僕の顔に当たつた物理的関係がありながら、相手は自分が殴ったという自覚がない。この状況は、いまの日本人とよく似ています。今日のこの紙（配布資料の用紙）も、途上国の農民を苦しめている要因の一つです。「そんなこと、関係ない」と思うのは、先ほどの「殴った知覚がない」ということと同じで、農民が苦しむことは途上国のみの問題だと思っているからなのです。

先進国は、16世紀以降、富を求めてアフリカ等から多くの人々を奴隷とし、三角貿易をした。よって先進国は大きな富を得て、産業革命が起り、そして科学技術が発達して、日本もその技術に便乗して、今ではコンピューターシステムに制御された社会となった。だから、日本人はアフリカ人と関係ないと思っても、私たち日本人が今ここにいるのは、アフリカ人の過去も大きく関係しているのです。

このような見えない関係をつなぐ方法は、例えば一種の象徴とされている「弔い」のように、「象徴」空間を活かすことも、一つの方法だと考えています。

質問：路上を当然のように売り場にしている人と、スラムの人の暮らしを見て共通性と言いますか、近さもみえかくれしますね。

岩崎：確かにそうなのですよね。でも、なかなか現実にはそうはいかないし、たとえばスラムは麻薬の温床になっているという話しもあり、難しい問題です。

質問：岩崎先生の自邸のお話にあった「建物は壊されてしまうかもしれないけれど、時代を超える力を建物自体が内包していれば、その建物は残されると思う」とのことでしたが、しかし、経済的や社会的な要因によって、建物が滅失することがあると思うのです。その解決のために横浜市では「歴史を生かしたまちづくり」という制度に基づいて建物の保存等がされているのですが、歴史的な建物等を残す意義等について岩崎先生のお考えをお伺いしたいです。

岩崎：北仲スクールの建物もそうだけれど、歴史ある建物はその建物自体が持つ魅力があると思うから、保存という動きにつながっていると思うんだ。新しく建てれば、野暮な建築家も多いから、その地域や景観が良くなるという保証なんてないからね。だから、そのような意味で価値を判断しているわけです。でも古いから良い、というわけではないのです。

北仲スクールも壁が剥がれているし、良い建物とは思わない人もいると思う。でもこの建物は方法によっては、歴史を生かすような魅力ある空間を造れる、変えられる可能性があると思います。だから、歴史的資産をどうやって利用するか、ということによって新しく作るよりも、魅力あるものを造る可能性が十分にあると思います。

質問：先ほどの町づくりの「7つのキーワード」に、なぜ「歴史を生かす」というものが都市づくり、街づくりに大事なのでしょうか。

岩崎：でも、みんなもそう思っているでしょう。

国吉：そうですね。岩崎さんは、当初からキーワードの中に歴史の事を重視されていましたね。

岩崎：当初から「歴史を感じる」「歴史的資産を大事にする」となぜ僕が言ったのかは、今になっては過去のことだから詳しく思いだせないけれど、歴史的資産の魅力は、今以上の価値を作り出せないからとても魅力的です。

国吉：当初から街の個性を大事に、個性をつくろうとし、そのためには歴史は大事にしたいと言われていました。我々は都市のデザインと言いつつも、様々な人、国、そして世界へつながっていること考慮する必要を改めて感じました。その上で、我々ができることを再考し、次の都市デザインを展開させたいと思いました。今日は様々にお話が広がりました。ありがとうございました。